

分離派建築会の展開 ー新しい都市と社会をめざして

建築実践へ ー山口文象と創宇社建築会の建築認識

佐藤美弥／埼玉県立文書館

分離派建築会(分離派)に第 4 回展覧会(1924 年 11 月)から参加した山口文象(1902-1978)は、徒弟学校卒業のノンエリートであった点で分離派のなかでも独特の位置を占める。山口は 1923 年 9 月 1 日に発生した関東大震災の直後に、通信省の営繕部門で製図工や現場監督として働く仲間たちとともに創宇社建築会(創宇社)を結成、1930 年までに 8 回の展覧会を開催した。

1922 年、後の創宇社同人の一部が、京都で開催された分離派関西第 1 回展を観覧し、分離派会員と交流した。とりわけ重要であったのは山口を始めとした創宇社同人と似た経歴を持つ蔵田であり、彼は創宇社の庇護者となった。

震災をきっかけに結成された創宇社であったが、その主張は、歴史様式の模倣を批判し、彼ら自身の内部からわき出る創造性を重視するものであった。「パンの問題」以上の意味を建築作品に込めるためには、既存の規範を否定し、正当性を得ることが必要であった。

創宇社による創造性の追求は、アヴァンギャルドとの共同へと展開した。芸術家グループ MAVO との交流や単位三科への三科を通じて、民衆に働きかけるものとして建築というアイデアと、ロシア構成主義の意匠を受容した。彼らは現実の建築に関わるうえではニーズに応じた意匠を採用したが、展覧会や紙上の作品においては、新しい都市社会のための建築に、ロシア構成主義の意匠を応用した。

1929 年までには建築作品を裏付ける理論においても新しい思想を受容した。山口に顕著にみられるように、彼らはマルクス主義の歴史認識をとることをはっきりさせ、来たるべき社会のための建築を展望した。そこではモダニズムの素朴な受容は否定され、現実に応じた「建築実践」が提起された。

空想の表現としての建築を通じた自己表現から始まった創宇社の活動は、ロシア構成主義の新たな意匠の受容を経由して、「建築実践」への方向を切り開いた。このアイデアが彼らの 1930 年代や戦後の活動へとつながっていく。



図 1
創宇社第 8 回展会場での同人たち/1930/
竹村文庫蔵

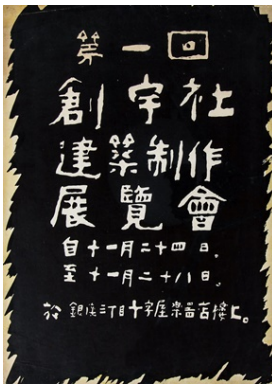


図 2
第一回創宇社建築制作展覧会ポスター/
1923/竹村文庫蔵



図 3
音楽と野外劇のために（第 1 回展）/
岡村蚊象/1923/『建築画報』15（3）



図 4
創宇社建築展（第 8 回展）ポスター/
1930/竹村文庫蔵



図 5
紡績工場の女工寄宿舍提案（第 8 回展）/
岡村蚊象/1930/『国際建築』6（11）